

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

【図書紹介】『「持続可能性の哲学」への道 ポストコロニアル理性批判と生の地平』 牧野英二著
法政大学出版局 二〇一三年

著者	相原 博
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	10
ページ	67-67
発行年	2014-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/9136

【図書紹介】

『「持続可能性の哲学」への道』

ポストコロナリアル理性批判と生の地平』

牧野英二著 法政大学出版局 二〇一三年

相原 博

本書は、現代の哲学者との対話をとおして、持続可能な社会を実現するための道筋を示す試みである。「持続可能性の哲学」とは、環境保護と経済発展との調和をめざす社会の持続可能性を保証しうる哲学であり、自らの持続可能性を保証しうる学問研究としての哲学である。二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災とそれに続く福島第一原発事故は、持続可能性にかんする従来の考え方を無効とし、あらゆる学問や科学技術の存在意義に疑問を投げかけている。そのため著者は、「3・11以後」の社会にふさわしい「持続可能な社会」のあり方を提示すべく、「持続可能性の哲学」の課題とその解決の方向づけを試みるのである。

本書は、持続可能な社会をめぐる問題意識によって貫徹された十二の章から構成されている。第一章は、錯綜した現代社会に生きる他の国民・他の民族・他の文化圏や、他の価値観をもつ人間の間で「共有可能な」哲学的思考の可

能性を探求する。第二章は、アジア文化を含む文化全体が今日陥っている「文化の危機」を克服するための方途を探求する。第三章は、科学技術と文化の発展の影に「心のゆがみと社会のひずみ」を洞察しつつ、心の哲学と生の抑圧にかんする問題の所在を解明する。第四章は、「輝かしさ」と「悲惨さ」を増す人間社会の現実を踏まえて、「理性の必要の感情と生の地平」という観点から、カント哲学の今日的意義と役割を照らし出す。第五章は、カントの「世界市民主義」の思想と「ポストコロナリアル理性批判」との関係論じ、二十一世紀の東アジア文化圏でカント哲学を研究する今日的意義を解明する。第六章は、理性批判が今日直面するアポリアを解明し、多元主義的な「公共性」および「再帰性」の概念を手がかりに広義の知的批判の可能性を探求する。第七章は、「超越論哲学と解釈学」というテーマを手がかりに、普遍主義と相対主義との対立構造を根本的に検討する。第八章は、学問論としての哲学と人生論としての哲学との二元論にかかわる問題を取り上げて、ディルタイが「歴史的理性批判」と呼んだ試みと「生の哲学」との関係性を再検討する。第九章は、いまここに生きる個人とその実存、それらの歴史の物語を多元主義的視座のもとで語るために、ディルタイとの関連から「実存と歴史」との関係性を考察する。第十章は、リアリティーが失われつ

つある時代状況を踏まえて、ディルタイの「実在性」概念の今日的射程を照らし出す。第十一章は、永遠平和の実現に不可欠な正義および公平性の問題を、税および財政制度との関連から考察する。第十二章は、本書全体の結論を兼ね、今後の課題と補足説明を試みている。

著者も指摘するように、日本社会は「3・11以後」、近代以降で最も困難な状況に直面している。こうした状況で「人間らしい生活」や「人間にふさわしい社会」を実現するための試みとして、本書は重要な示唆と提言に満ちた価値ある書物である。